

## 既成政党を超えて 新しい政治を目指せ

衆議院議員 城内 実



政治家は「大きな絵」を描け

—— 政権交代以降、外交は後退の一途だ。

城内 昨年十月、ジュネーブで開かれた「列国議会同盟（I PU）」に参加してきたが、会議の傍らロシアとの二国間会談を行った。その際、ロシアの国会議員相手に北方領土はわが国固有の領土であるという我が国の立場を明確に主張したところ、なんと同席したある民主党議員とその秘書が「相手を刺激するのは良くない」と止めに入った。民主党左派の外交センスを象徴的に表す出来事だった。

相手に誠意を尽くせば相手も誠意で応えてくれると思うのは、大和民族の美徳ではあるが、こと、大陸国家を相手にする場合、そのようなナイーブな態度は通用しない。大陸国家には我々とは異なる、大陸独自の思考様式がある。それを踏まえて外交を行わなければならないのだ。

大陸の思考とは、端的に言えば「損得勘定」だ。プラスマ

イナスで考えてプラスのほうが大きいとなれば押してくるし、マイナスだと考えれば引く。だから日本としては相手の弱点、アキレス腱を十分研究しておき、相手が日本を敵に回すとマイナスだ、と思うような態勢を整えるのが外交の基本だ。

ところが、特に領土をめぐる民主党政権は停滞どころか後退するばかりだ。ほとんど土俵から押し出される寸前にまで来ている。北方領土について言えば、ロシア側が「日本との間に領土問題は存在しない」と言わんばかりのレベルにまで後退した。

外交にはしたたかさが必要だ。したたかというのは、何も積極的に相手を騙すことではない。相手に騙されないようにする知恵があるということだ。

—— 対中関係も押される一方だ。

城内 これからの十年、二十年、中国がどのようなになっていくのか、そしてその中国に対して日本はどのように対応していくべきかという「大きな絵」が描けていないから、常に場

当たりのな対応になってしまふ。そして結局は、尖閣諸島をめぐる一連の出来事を見ればわかるように、経済的にも軍事的にも中国に押し切られてしまふことになる。

「大きな絵」を描くのは政治の役目だ。やたらと外務官僚の無能さを叩く者がいるが、外務官僚は外務大臣の示した器の範囲内でしか仕事はできない。実際、外務官僚の能力たるや、先進諸国と比べても遜色はないだろう。結局、日本の外交力そのものを決定づけるのは外務大臣の能力なのだ。

対中国外交についても、向こうは「損得勘定」で来るのだから、「あまり日本を刺激するところらにとつてマイナスになる」という状況を作りだすことを考えるべきだった。中国内の人権問題で揺さぶり、北京の足元に点火してもいいし、国際世論に中国の帝国主義の危険を訴えてもよい。

だが、尖閣事件の時の駐北京日本大使は丹羽大使で、彼は民間出身であり、すなわち外交の素人だ。JALの再建などの仕事であれば大いに手腕を発揮したかもしれないが、外交には外交のルールがある。重要な外交課題にいたずらに民間の思考を持ち込んで、日本外交全体がおかしくなる。

—— 対米関係においては、菅総理は突然「平成の開国」と言い出して、TPPを推進しようとしている。

城内 「これが時代の趨勢だ、バスに乗り遅れるな」と、自分では良いことをしているつもりで、結局は自滅行為を行うという、小泉・竹中流の郵政民営化の二の舞になる。グロー

バルスタンダードはアメリカンスタンダードという単純な事実気づかねばならない。

貿易の自由化というのは重要な課題だが、しかしすべてを自由化するというのは全く別問題だ。貿易の自由化というのはどんどん服を脱いでいくようなものだが、最低限、風邪を引かないように下着ぐらいは譲らず守らなければならない。どの国にも守らなければならないものがある。我が国の場合、たとえば農業を始めとする第一次産業だ。

日米同盟は重要であることは間違いない。だがそれは主従関係ではない。アメリカも大陸国家であり、その思考は「損得勘定」をもとにしている。日本はライオンハートになれる状況にはないが、チキンハートならばチキンなりに、身の処し方があるはずだ。例えばアメリカ国民の多くは素朴に「アメリカの正義」を信じているのだから、アメリカ国民世論に訴える形でグローバルスタンダードの不正さを訴えることを考えても良い。いずれにせよ、大陸国家を相手にするときの「大きな絵」がなければ、日本は単に大国に翻弄され、領土も国富も搾り取られていくだけだろう。

笑うに笑えない、悲劇的喜劇が今、我々の目前で演じられているのだ。

—— 政権与党には「大きな絵」を描ける政治家がいない。

城内 当事者能力がない政治家たちが外交を担っている状況だ。これまで積み重ねられてきた失策を挽回するのに莫大な

労力が必要になるだろう。

私は常々、「勇気と覚悟と突破力」という三つを大事にしてきた。この三つを備え、確固たる国家観がある国会議員が十人も集まり、メインプレーヤーとして活躍できるようにすれば、政治はガラリと変わる。

そのためには、民主党も壊さなければならないし、自民党もまた壊さなければならない。民主党というのは緊急避難的に設営された仮設住宅のようなものだ。永住するには脆すぎる。一旦壊して、基礎工事からやり直さねばならない。

一方、自民党というのは長年に渡って改修に改修を重ねてきたが、もはやこれ以上の改修は不可能なほどに老朽化した古家だ。やはり一旦ぶち壊して、基礎工事からやり直さなければならぬ。

仮設住宅と古家の、どちらが住み良いかを争っている場合ではない。両者が少しずつ金を出しあつて、新しい大きな家を建てるのが一番合理的だ。

たとえば、民主党には郵政解散時の「小泉チルドレン」に比すべき、棚ぼた式に当選した新人議員が無数にいる。彼らこそ、「小泉チルドレン」の教訓から学ばなければならない。彼らのほとんどが次の選挙で落選することは分かってきている。ならば、座して死を待つよりも、むしろ死中に活を求めべきだ。それも私のために決起するのではなく、いやすくも国会議員のバッジをつけた以上、「公」すなわち日本国家

のために「私」を捨てて、「やむにやまれぬ大和魂」で自分の党を破壊すべきだ。それでこそ政治家としての存在感を示すことになり、再選の可能性も開けてくるというものだ。

本来、こういう構図を描くのは自民党のお家芸だったのだが、今の自民党には他政党に手をつ突つ込むような大胆な政治家がいなくなってしまった。かつての自民党であれば、次の選挙で比例名簿上位での自民党からの出馬を約束して、民主党を割らせるような荒業を使ったものなのだ。しかしそういう剛腕政治家がいけないというのも、ある意味、幸いなことだ。今の段階で自民・民主による大連立などやってしまえば、政治は取り返しが付かないほど劣化してしまう。

## 第一の選択肢としての第二極を

城内 幕末には脱藩浪士が政治を動かす核となった。今、必要とされているのは、脱党浪士となつても、国家の運命を優先して考えられる人材だ。

変革の兆しは確実に芽吹いているようだ。私は幸い無所属議員だ。この立場を活かして、民主党議員と自民党議員との顔つなぎぐらいはできる。といつても、勉強会を開くような大げさなものではなく、一緒に食事をして話し合うぐらいのものだ。だが、それがいいのだ。最初から勉強会では、冒頭から意見がぶつかつて、平行線で終わってしまうことが多い。そうではなく、主義主張、党利党略を越えて、人間と

して相互に信頼関係を築くのが先だ。私がその触媒として役に立てばよいし、この触媒がやがて化学反応を起こすことになればさらに良い。

—— 自民党でも民主党でもない、第三の選択肢を用意するということか。

城内 「民主もダメ、自民もダメだから」という消極的理由で選ばれる「第三極」では意味が無い。私は前回の衆議院選挙で、無所属でありながら小選挙区から約52%の得票率を得て当選した。つまり、有権者から「民主でもなく、自民でもなく、第一の選択肢」として私の名前を書いていただいた。

同じように、新しい「第三極」も「第一の選択肢」となるようなものでなければならぬ。そのためには、中途半端な政策ではダメだ。有権者が度肝を抜くような大胆な政策を掲げなければならぬ。

例えば、議員定数削減にしても、一割削減などという中途半端なものはいけない。議員定数を現行の六割程度にまで削減するぐらいのことを掲げるべきだ。また超弩級の経済対策、財政支出、公共事業を掲げるのも良い。日銀法を改正し、増税どころか減税を訴えるのだ。

要するに、今、日本人は目指すべき国家目標を見失っているのだ。何度も繰り返し返すが、国民が元気になるような国家目標、明るい「大きな絵」を示すのは政治家の責務だ。そのためにどのような大胆な政策を掲げるか、ということだ。

たとえば、日本は科学技術立国だ。であるならば、さらなる科学技術振興を国家目標に掲げて良い。科学分野の各賞、ノーベル賞やフィールズ賞といった国際的な賞を獲得した研究者には国家が十億円を報奨金として与えるなどすれば良い。プロ野球選手が数十億円稼いでいるから、それを目標に全国の野球少年たちは切磋琢磨し、裾が広がるから山は高くなる。同じように、学問に励めば野球選手並に報われるというイニシアチブを国家が用意すれば、勉強の得意な生徒も一層身を入れて勉学に励み、学問水準も上昇するだろう。

政治というものは三次元ではなく、四次元的に考えるべきだ。四次元、すなわち、空間に時間軸を加えた視点だが、時間軸とは過去・現在・未来のことだ。過去、すなわち我々の御先祖様、そして我々の子孫である未来まで見据えて、その両者に責任を負う形で我々の現在がある。この時間軸上に自ずから表れ出てくるものが、国家目標と呼ばれるものだ。

さらに言えば、私は五次元的な視点をも持つべきだと考えている。それは、神々の世界だ。高天原におわします天上界の神々から見たときに照らして、地上界の我々は恥ずべきことをしていないか、間違ったことをしていないか、これを常に意識しなければならない。

歴史と神々の視座から、我々の取るべき道は自ずと明らかになってくるものなのだ。